

Title	頸椎症性脊髄症の病理組織像, およびその成因における脊椎管前後径の重要性について
Author(s)	荻野, 洋
Citation	大阪大学, 1988, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/35682
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【75】

氏名・(本籍)	おさ 萩	の 野	ひろし 洋
学位の種類	医	学	博 士
学位記番号	第	7942	号
学位授与の日付	昭和63年1月6日		
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当		
学位論文題目	頸椎症性脊髓症の病理組織像, およびその成因における脊椎管前後径 ・ の重要性について		
論文審査委員	(主査) 教授	小野 啓郎	
	(副査) 教授	最上平太郎	教授 北村 旦

論 文 内 容 の 要 旨

〔目 的〕

頸椎症性脊髓症患者に対し、臨床症状、X線検査、および剖検後の脊髓病理組織像を検討し、病態と脊髓病理組織像との関連性、およびその成因に関して、頸椎症性変化や脊椎管前後径のもつ役割の重要性について検索を行った。

〔方 法〕

対象は6年から13年間にわたり脊髓造影を含むX線検査、および神経学的所見などの臨床症状を死亡に至るまで定期的に繰り返し行い得た頸椎症性脊髓症患者9例である。全例男性であり、保存的治療のみを行った自然経過例である。

剖検に際し脊髓を脊椎と一緒に第1頸椎から第3または第4胸椎までen blocに採取した。脊髓が出来るだけ生前の圧迫状況を保つよう垂直位にてホルマリン固定を行った。約3週後に椎体後面の骨軟骨性突起や脊髓圧迫の程度を観察した後に横断組織標本を作製。まず横断面における前後径と横径の比である圧迫率を測定した後、病理組織像の検索を行った。脊椎管前後径は頸椎X線側面像での椎体後縁中央部と椎弓内縁までの距離として、各椎体レベルで計測を行った。

〔結 果〕

圧迫率の程度により二群に大別した。第1群は正常範囲内のもの、第2群は正常値以下の高度の圧迫率を有するものとした。

(1) 第1群の症例は4例である。初期症状は歩行障害、下肢腱反射亢進、軽度の直腸膀胱障害が主であり、上肢の運動、知覚障害は軽度である。末期に至って手指の筋萎縮、功緻障害が中等度出現してい

る。

脊髄の病理組織学的所見では圧迫髄節に灰白質前角部および中間部の僅かな変性が認められる。白質部においては側索に脱髄などの変性認めるも前索、後索は、ほぼ正常であった。非圧迫髄節では頭側に後索を上行、尾側に錐体路を下降する脱髄変性を認める。

椎体後面の頸椎症性突出は数ヶ所に認められ、いずれも中等度以上である。

脊椎管前後径は全例ほぼ正常範囲内である。

(2) 第2群の症例も4例である。初期症状では第1群同様、歩行障害、腱反射亢進、直腸膀胱障害などの下肢症状に加え両手指筋萎縮、巧緻障害など上肢症状が認められる。末期には上肢屈曲拘縮、下肢伸展拘縮を示す四肢痙性麻痺に至っている。

圧迫髄節での病理組織所見は灰白質全体に広がる壊死、空洞化、前角細胞の萎縮消失がみられ、白質では第1群にみられた側索部の変性に加え後索中央部まで脱髄、軸索の膨化を示した。

頸椎症性突出は第1群と同程度である。

脊椎管前後径は前例正常以下である。

(3) 残りの1例は脊髄圧迫率が正常範囲内にもかかわらず、灰白質での変性が認められた。この症例は入院中転倒を繰り返した既往があり、圧迫性脊髄症に外傷の因子が加わった結果このような変化が起こったものと考えられる。

[総括]

(1) 頸椎症性脊髄症9例の剖検を行い、その脊髄横断面の圧迫率により正常範囲内の群—第1群、正常以下の群—第2群とに大別した。

(2) 臨床像—第1群の初期症状は主に下肢障害であり、末期に手指筋萎縮、巧緻障害が表れている。一方第2群では初期にすでに第1群の末期症状である手指障害が認められており、末期には四肢痙性麻痺の状態に至る。

(3) 病理組織所見—第1群では灰白質前角、中間部に軽度の変性、白質では側索のみの変性を認める。第2群では灰白質全体、および白質の側索、後索中央部に変性を認める。

(4) 臨床像、および病理組織所見での第1群と第2群の関連性から、頸椎症性脊髄症の病理組織像の過程を推論した。すなわち、脊髄病変は灰白質中間部、白質側索部より始まり病態の進行とともに灰白質全体、白質後索部まで変性が及ぶと考えられる。

(5) 頸椎症性変化すなわち骨軟骨性突出や、脊椎管前後径など圧迫因子についてみると、脊椎管前後径のみ両群で明らかな違いを認めている。すなわち、病態の増悪因子に脊椎管前後径は重要な役割を担っていると思われる。

論文の審査結果の要旨

頸椎症における脊髄症の発生機序にはなお不明な点が少なくない。本論文は本症の9例において生前

長期にわたり観察し、死後病理解剖によってこの機序を解明しようとしたものである。

その結果、脊椎管前後径とその病理所見および、臨床像の重症度が相関しており、この前後径が脊髄症発生機序の因子として非常に重要であることを明らかにしている。また、脊髄圧迫率からその非可逆性病変にいたる臨界圧迫を求め臨床との接点を明らかにした。これによって、最近の画像診断で得られる脊髄形態からその病変の部位・程度を検索することを可能にし得るものと思われる。

以上の事柄により、本論文は医学博士論文に値するものと思われる。